



1278
23

村田



朝夷巡嶋記全傳第五編卷之三

東都 曲亭主人編輯

後輯第四十五

孝友の亡命人
新参の老實僕

吉見冠者義邦ハ曩ニ在柄平太胤長ヲ抑首せしが小袋坂の守屋ヨリ夫婦
主從徒々七人日夜番卒ヨリ守らせ相譚慰ふるがもあはれ
程ニ外面忽地騒々しく只今御教書到来せしと雜兵の罵声連々
原來より入るなりと主從耳を側らるる安らぬ宵の中時運
必死の覚期今や不騷々氣色ハかりなき且しく要拘人流長ハ我
更ニ一通の書翰を懐中し義邦のほろりなきつとて
便是和殿夫婦ハ和殿又胤長預りて在柄の痛所は召置べしと仰り江三二本

四箇の後者その名はえさるものかれは冠者と共召措べし但蒙二郎は其
 苟且陸奥より後ひきするものありし豫てその安えわまが家臣の四ははれり
 かれは蒙二郎は其の限りよわぬ故郷へ歸去兒ともその地を在んともははれり
 隨意の冬一附之又下知あり朝夷三郎義秀より既上聞は達せし則
 渠を徵せん為和由新左衛門尉常盛を越中國へ遣はれは伴の義秀は
 果して義盛の子である常盛は弟かれとも離別幼稚な時かれを送る面
 忘れぬらんありて江三廣光と常盛は俱して彼地へ遣せこれのそははれり
 義邦私に義秀へ一翰を贈るとも安否を問はんのそははれり答はれり
 多ふわぬと評定衆あり傳はれりその急せぬあやわん常盛は翌の朝
 啓行せしむるの準備肝要に又多賀藏人の禁獄を免されり和由義盛に領
 されし既その風聞あり藏人をかくの如し況冠者の犯す罪のわりともははれり

ん疑ひ稍解か本領安堵の日もあべ後懸し心懸し告慰あり懐かせし
 御教書を恭しくも披読し声爽は續けられ義邦は安果て額のたる頭と權
 仰謹て承りゆひぬ嫌疑の中より力を置べり罪をゆるん欲と安んぢるありしに
 假深か向三目浅くは物せられ貴所の領りとなりし多ふはけは幸ひ其
 のそ欲藏人朝夷氏の親族の方より召籠らるるは是れ不思儀の因縁
 いんや亦越中へのかん使は廣光と俱せられ郷導さんより歡び璧ま物なり
 彼義秀の思入に越路へかみ鳩の翅は一封の書を寄せよと決許せぬ思
 命は有かぬ辱を辱く望足りしゆとおそく答ふと胤長はくち點頭するに
 宿所へ相伴ん後者の揃ふ程もわれは物なく整へるしと心どつてははれり
 卒ホとも皆退しし側よ人のそははれりぬ當下義邦は籠姫共侶は廣光は
 武詮昌之蒙二郎はと近づく密に相儀あり意外にゆる恩命を授け



ちりあわねどもが身ハ内召籠らる廣光との放免し越路への
 案内せられ且朝夷へ書状を贈ると命せられありぬ。このくひに
 やんと向れて廣光頭を傾けその故詳をありしければ冠者もあはれ智の
 かわかきを既さる番卒へ退れられ況越路へ御導し某を俱せし頭を
 ゆるし幸ひに只朝夷の御指被箱向判五去歳より浅良井と小三ヶ口を
 飼へこの折も彼処よりめり謝を述べし主後の誠心と憐れみ神仏の
 冥助小てわらぬと又ハ武詮声と細めて否然むらわらぬ。越路へ遣
 へるその面を認めざる常盛所の釋人似たり又朝夷は贈れ冠者書状を
 許されハ朋友の義を重しとほる彼人遂は推辞しなく微も忘せんありし。
 あつたその文面は私の義を述べし一行は安否を訊ねるその東行と勅も
 あは彼嫌疑を避る宜くおん旨も叶せん窮谷の飛鳥とて友とあはれ選ると

どの多賀野の冠者の人をも若神へさる朝夷の招きを夜と日
 継この地はあはれかしく彼人召され柳堂は仕へる勉之禁錮を釋せんや
 譬ハ尾羽を抜れ鳥の再び翼を生じ如く又これハ助也あはれ賀としと
 真実とちり密語ハ義邦齋く領たり四郎が考その理は稱へりさあはれ
 ん之れハ廣光昌之歎び四郎ハその才兄は似れハ職量廣く先見あり言ふ
 違ふるはこれ吾黨の馬白眉歎いと愛しとを稱するそが中ハ藁二郎ハ尚れ
 けり此面色ゆる入々の背もさるを義邦もあはれ傷に近づけや藁二郎は
 附驥の幸ありと父の本領三かひも返し賜るあはれさるの酬しと
 あはれさるあはれ愛も俱る甲斐あり今ハ鮮み画餅とありぬ。この
 汝ハ免れし牙のほと安かりしを歡しぬやあはれと舊里へ還れ。晚稻ハ
 熟果て田の草とる比かれハ人ハ俟て牙ありぬや命あり時あはれ復あはれ

此の如くわく下とゆふ亦廣光ホも共ニ帰郎と勸レバ菅原二郎ハ果シテハ
 多ひも子守多下野大親もか子守多妻もか此の誰少俟れ也死多身正夫の
 悲しき後者の教子漏れれ多くよあふぬ。されど冠者の先途を見果れん
 故郷へ還るべくもあらず在柄の第子置れぬ三三河の後者や若神へ保し
 陸奥へゆれし時朝夷の環會を遂に冠者は見参りて讐敵の軀を刺し
 上難うあまの鴻恩あ人を身ひありとも彼地は邁り迎おり死なれ
 此度の仍も俱さあ頻り清て正さるるを義邦これとちあま志はさる
 あれども三三が若神へ赴くハあ方より遣さるもあらずあ營中の沙汰あ
 ちの後者ども隸んとゆふ必人疑んるを死なれぬ心朝夷のあまあ
 んこの残へゆ後ひびきとあまか中もあ絶く故郷へ還るもあらずと諭六
 廣光徒忠も文武程も昌之共侶は利害と死くあよりかへり去れは菅原二郎ハ

嘆息してあつべカ及びぬあべ。あ望せほ遂ども其ハ今や舊里
 赤貝へ還りか。とづりい何とあああ思されんあ悪し
 あれがあまのいひもゆりも懺悔の為はあえあん其元来只一個の眞父
 形兄ありその名を穗之助と呼れり親苗四郎の母の為は後招の贅婿
 あれが穗之助とを継かり死するああ稚少時より父ハ只顧其との愛と
 兄も笑顔をもみ。さああ怒ども罵遣く打懲しつらむとあ
 あれが母の心の休らむ恨ま泣つ禁るの口舌せし日も多かり然れども
 穗之助の素より孝行等閑な腹黒死親は情を愛は継父の隔
 ちく已と責む事へく人み於言ぬものか。かそあまこの年と歴て足
 成長り比母持病の瘡重りく竟もむかりなりあなり。され特を失ひ
 袖の涙あま乾りども母の中陰果一日は兄穗之助のあま世と形かくひ

〇〇弟の家を嗣せん為にこの身を隠しと書遺してゆかばは往方おれど
 父は今何胸を潰して慚愧後悔甚しく一郷四鄰を騒ぐ日あり経つて
 索しども所在絶えぬと云えぬに母と兄は死せしむるに又生れし
 〇〇哀このやうな事なくはくはくして親の家からあつた影護し奉公
 せむと尋思ふ親苗四郎は清勸を授け家へ入りしは年を経つて
 親の齡の傾けはくはくありけり里は定りて幾日もあつた痛
 〇〇後弟の引太郎共侶乃野時夏が非
 道の刃は忽地命を傾けし折れ冠者も誣られて加北へと走りゆく
 〇〇先途は後ゆく稟する恩義を答んとす親の葬礼も親類
 〇〇浅良井の刀自母子は俱しく若神の郷へ赴た又この春ハ冠者の
 窮厄灰はまきく心もあつた世は死人とありけりその骸骨も歛とす

〇〇陸奥へ赴た申斐あり冠者を見参せし親の讐敵の
 〇〇軀を刺して志を致しその歡びは哀とありけり再度の別離
 〇〇幕ゆく来しものを得安くぬ主と俱せぬ追々恨も後笑
 〇〇舊里への還りけりとのこの故に兄徳之助が孝烈の志
 〇〇阿容とて親の迹を承嗣する本意あり
 〇〇冠者の安否を外から訪むるとありけり東の
 〇〇諸國の道俗多く聚合り徒ら日を送るに似れど後より
 〇〇絶えぬ久し兄が往方の終末ありけり
 〇〇又陸奥へ赴たし一ツの冠者は遭人又一ツの兄は環會とありけり
 〇〇心よとて起りたるもの苦しみ多しと察しぬといひけり
 〇〇誰が人獲り神埋の

挾社鹿のぬ二ホ四人の耳を多傾けて頻に感嘆をうらりる中義邦の
 感涙坐す禁のこもる目皮をさぐりて通微妙に蒙三郎初家
 比のさうりかもあがり一小家の報忠孝願礼雪の中は松柏の標を
 このすむん現この弟中七彼兄あり匹夫も志を奪えりたあつて望は
 せん六火この地は足を駐り可借路錢を費はとも兄は遭はるる吾侪の
 為すも絶えぬゆゆたをともかとも舊里へうへうと決意を要し鎌倉
 送らるるまがなる武藏の太田の莊に赴けり光仲の内室と交えり且見
 姫を慰めぬ彼婦人の薄命を親廣綱は捐らるる良人の不測の罪を
 ゆり老黨間中守直八先も還るといふも宮中の沙汰定まるる風聞
 紛紜らん中を愁傷をそと想像すべしその良人の苗守も毫毫と
 訪ひてしゆまご面をさぐりても蓮姫の文をさぐりてこれが消息を

豫て相識る守直あり心をさぐりてともかく歡びて苗守は久に彼処に身置
 且見姫の資と終つて夫婦の龍居は後人より遙に勝るる慶の
 心を問ひて姫へ歡びげをさぐりてあつてつせぬ世は類に憂ふも夫の
 侍りてを猶慰ふもあつて幸ひ人の幸をさぐりて妻も増さぬひぬ彼方
 がい痛めりさよ對面せしと侍りて間中隼人が噂して名をさぐりてん
 ともかくも計しせぬと回答ぬ廣光も四人も共感佩しく安危の巷は在ぬ
 朋友の美を敷くたへその苗守も訪せぬこの忠操あつて現蒙三郎
 相恋したる便を辞げぬとさぐりて蒙三郎初家とあつて笑はるるこれ
 善夜鎌倉の日を送るる在柄の弟は起て冠者は見参るるあつて
 地ありとさぐりて定ぬ兄穂之助は遭人とさぐりて難はるるあつて鎌倉の風聞
 あつて太田の莊へ三十里のあつて下野に在るあつて鎌倉の風聞

彼地へいそぐはえん陸奥之宿志を遂し朝夷の賀殿と内外より賊
 柵を攻落しあつたこの両将の賜められぬや越路へは適はく太田の莊赴くとも
 思ふ答ふ志のれ道も若くはたしければ主命のかわりか粉本意の協へん
 消息を急せんと愉く承引く處し退り料紙硯を惜りて塵埃を吹く
 贈りて共筆を深うなるかくて夫婦二通の書翰を授けし封しり
 菅三郎はこれを遞与しく口状を云云とあちのけり打りあれ迎の轎子来り
 と菅柄が家隷業内く布の幔幕引攸りせせと促せ義邦躬て身と
 起して菅姫共侶は縁頼は立けれ轎夫が擡まは二挺轎子嚴重は影の土
 卒立聚合し或は義邦と菅姫を扶衆し或は廣光繼忠武詮昌之ホどう獲て
 前駆後従の隊伍正しく菅柄天神のほり第宅を授けし神おはし亂長は

後者多く抱く馬上ゆるく拍せりかぐら殿を神うりるされば又下知を受く
 かの苗れる雑兵の城戸を解け守屋を毀く新関をく廢られくこの夕なり
 人の往返も常のどくやかりり程は菅三郎へ恍惚とて追立られ候とて
 離別も堪はぬその故主の轎子の後し跟は又傷まはれ追遣られ候とて
 おも邁るか其処ともあぬ菅柄の社頭まで来りて前面に亂長は
 門の守の緊しきまれば内へ入れ給ふ又今頃は朽をくも悵惘とて
 立在程は長兄夏の日々をり常ありそく黄昏く林かか鴉もこも
 わん死はあざれば今宵は小町のほり客店に宿投りかか且く運りて
 菅柄の社に詣りて義邦の妻異を祈り亂長か宅地の邊を徘徊し又若宮を
 和田義盛の茅を觀り市中の風聞を撈り菅柄平太亂長は和田氏の悪流
 やしく義盛の後弟をの第、柳宮の東菅柄の前面をり時の人異稱して菅柄

平太と喚做う柳義盛の祖父を義明との三浦大介是なり義明の嫡子と和田
 太郎義宗とは是則義盛の父之義宗の季弟と和田平内義長と以て義長の家
 男八則平太胤長之胤長との姓名を好む客を愛ひてと大なるを文藝藝ありと
 武術も此世の鳥傑と交ると身の樂まきとれが圖らぬ吉見主将を領けられと
 面目よりその款待は意を用ひて守御の士卒を遠く坐りて窮屈せぬ
 やにあり又光仲を領けられる和田左衛門尉義盛が當時鎌倉宿老の功臣は
 あり侍所の別當とすその性親戚を敦く歡で人の善を稱へ弱を助け利の
 為とす又光仲の識量明をひく決断は疎うさびと光仲が罪戾は皆是
 実の証告おんと人といひ我も及べ厳命こととゆいこれ宿所は召籠られど
 罪人として執板せとく東面を編房は光仲を安措ふその居るを飛つけぬ
 家録をとり成を成其甲とのひ老女と男童二人を果らせとる所要と達す

光仲の文武の才長とすその大功のむかひを憐れ且と子義秀と交り
 浅くはせけむと又義盛の嫡子常盛は義秀を徵聘のせ使とて五月
 廿四日の朝未明は老黨腰越越六郎小從者多くおと且郷導の為江三廣光を
 相携越中國婦負郡岩神の郷民稻向判五が宿所を救起りたりとす
 廣光ハ廿三日の甲夜の間に義秀は届ふ義邦の書翰を受収む程柄が私卒か
 護送れて和田の第へ赴けり常盛馳て對面し御導の日をもつたおれは
 光仲ハ召籠られぬれは室はありともぬる人同志にありぬるは懐かしく臥
 房の紙障又房櫳の伊与兼ふ隔られぬ日越路へ赴けり常盛は
 これらの風聞を彼は問ひ此はさきく僅ふ心を安くし遂は鎌倉とありとす
 太田へ急ぎ五月廿九日その日未下刻既に件の里にあり人に向ふ隠
 ぬる廣綱の莊院を衡門を向れば甲門の扉銷固く角門の些開り時夏

最中初の母屋の端の障子に閉籠る内人影ありともわが進み又
るるよれし拂ぬ夏草の彼此は生糸糸なる樹上は高き蟬の
熱き草の木の洞より立んと欲されば檐下は無き蜘蛛の網
うの驚き退けは樹垣より促微のこくと花の掃ひもあはれ
三飲する肩は集るるあつた宿のたかまては荒く守る人の心
かんと想像する曾塞りくもむ鼻の音や洩る内より人の誰と
障子を磔とむくのは是則別人の中間中集る守直に樹と
藁二郎と面をわくあつたのふとむく又疑ひあつたを答れ
藁二郎の遠く式臺の板縁より声と細く某は只むとを答れ
詣あつたを訝しくせんこの種の情由ありく冠者の使も立
消息も齎しつたむなる多かれどもあつた端近しとの守直

何ぞ秋の夕日と秋の夕日と誘へば藁二郎の草鞋と膝
片を累て笠を被せ端折し単衣を引替りて拭く拂ふ珠を
流る汗を拭くも免を免と小骨を折りて客房に赴け窓の下
坐を占れば守直も對ひたり當下藁二郎の故主夫婦の口状
安否を答ひ叔光仲の夏之趣及義邦主従の義秀の風聞高利
高吉の事とて天略を説き一通の書状をとり御
さよの守直の標署を乞ふ恭しく受捧げ義邦の贈り状の封
折知るる返し又返して読果て感涙を流り現冠者の懇切なる
文面は和主のまゝ曲は載せられりる寤尾の中中かまを心
多くゆゑ死滅心は只冠者の和主の死心操感もあつた何
より先へ告ぐ死の日吾侪の栗橋へ入るる別れありとの次の日
帰郷し

且見訪
太田の莊子
藁二郎



同中筆



且見

車馬五續卷三



多賀殿の武功帰陣のよし且見姫を報せし歡ひ身大さなれば已
 べなれば前司殿の世をゆり捨て往方も亦た有りし事の趣と潜き
 ありし七像見の三種を進ませし姫入の姿も果に光色の變り果て
 泣き涙ハ神より外なるぬ驟雨は宵ハ板屋の破廂あが堪て過れば
 悔の八千六百十遍ひかたハ泣き泣きハ哽たり咳おびて衣引被れ臥し
 現れ歎けの理り之襦袢の中より大殿より廣欄を養ひし枝廿年以來実の親も
 異なり恩愛の羈絆を断れと惜みの深處も只孝心の切多所以推せ
 こそありこれ去歳の冬ハ菅蒲の尾公の病と成り世を逝ゆ今茲又
 かく大殿を捨られぬハ此の中を量りて心憂めあはれぬを
 臂近く使し校枝の女子をこれ彼諫めたり一日二日と経ぬ鎌倉
 風空をよも安をて多賀殿ハ云云の事ありその罪輕くさればと
 荏田氏台命を奉り小袋坂を出逆へて忽地は搦捕りぬ吉見殿ハ云云
 筒様と報知らるるなり其軍役は後々彼新聞より追還され此大田の
 里人あれ紛れあはるるあり且見姫ハゆゑ大田の元往方とあり
 宵のつれ雲霧むしあるをわきまて又彼凶變傳へて其身をぞく宵潰れ魂消て
 霎時ハ氣息すゆた校枝ホ大く驚駭なり枕方より後方より抱き起し
 らつ只音は喚活き声は吾侪も驚き走りつれ湯液を勧めさめく不
 勅し程はやかくしぬなりあひたあはれぬも不依し枕もあけ物も
 五月雨の濕りぬ袖朽く檐の玉水音ハまればも果敢てわく同答
 心の中神仏の擁護を祈りわきまて痛き限りもあはれぬと
 赴け多賀殿の入営中の沙汰をの細しを知りしと受ハ駭て云云
 望えあけく笛守を老僕小廝は任り陸奥より嗣立する葉毛の駒

仁田氏台命を奉り小袋坂を出逆へて忽地は搦捕りぬ吉見殿ハ云云
 筒様と報知らるるなり其軍役は後々彼新聞より追還され此大田の
 里人あれ紛れあはるるあり且見姫ハゆゑ大田の元往方とあり
 宵のつれ雲霧むしあるをわきまて又彼凶變傳へて其身をぞく宵潰れ魂消て
 霎時ハ氣息すゆた校枝ホ大く驚駭なり枕方より後方より抱き起し
 らつ只音は喚活き声は吾侪も驚き走りつれ湯液を勧めさめく不
 勅し程はやかくしぬなりあひたあはれぬも不依し枕もあけ物も
 五月雨の濕りぬ袖朽く檐の玉水音ハまればも果敢てわく同答
 心の中神仏の擁護を祈りわきまて痛き限りもあはれぬと
 赴け多賀殿の入営中の沙汰をの細しを知りしと受ハ駭て云云
 望えあけく笛守を老僕小廝は任り陸奥より嗣立する葉毛の駒

ついで只一昼夜は彼地へ到り、折しも小袋坂の新関へまゝ城戸を毀捨て、
番兵退却ぬと見え、聊障もとりぬく馬を勧めて鶴岡へ八幡宮へ詣つて、
多賀殿の厄難消除を黙禱して退け、既中々日ハ暮らうその宵ハ市に
宿りを投ぎ、巷説をうちやうち多賀殿ハやなぐ禁獄ありけり、和由義盛
ハ領けられぬ、吉見殿ハ云々との大々として知るのみ、目今和主の報えハ精細
なる類あり、彼ハ彼下河邊高吉やも逢ふ、一雨日逗留共便り、
とあり、此やとあり、姫ハ病著も亦心なれば、次の日馬を康として帰郷
せし、まのめ、あるは留守を任する老僕小廝ハ耳怕しく連累せられ、
あひえ某が如く、ぬ程ハ皆悉、遂電ハ婢女輩ハその父母の病著をいひ、
之ハ身の暇を乞ひ、僅ハ残り、苗の校枝一人あり、只是不便の事
の、これども且見姫ハ多賀殿の禁獄より出され、云々との風聞をよ、憑り

る、小おぼしく、あつらん、史ハ命まの、さあ、死や素より无実の罪、
う、
け、
冠者より和主とあやへ寄、
件の物語と、
あつ、
え、
歎待しく二通の書状と携、
ま、
ら、
つ

草言 五
秋の物と斜に尺かまの和まは對面してこれ枝の物語と安んずるひひひひ
病の依は乱れる髪あげをぬきつゝハせんあうく響たせよと宣ふ文
かた風爐を焚まる男のたれがあら態の疎くも笑れやせん筒後枝
桃と早瓜を血は盛るるせめても草葉三郎は勸むが受くくのと著を杭
教をのりのかくまふおん管待の物体や給事人達の乞ふたれあつ甲斐
火を打せ水と汲して使ひは實のよせしねんかふ窮屈の本あつて
煮く物となすべし露をうも欲うばあを後をを賜りあうとて小男
死に草野で育骨ハ堅くて牛も馬も劣らぬものと二十里の行をせし
疲勞さして死に病更竈門へ退りて夕餉の支度仕らとせりやと起る
隔かた老實人のあう言葉は頭にしてう糖ぬ客態は守直校枝の舎笑て
憑らるるれども今本一人をいへて使入日数限のぬ道苗やうはせを望まを休ひ

